

(2) 地域創生部門

部門長 今井 潤 (三陸復興・地域創生推進機構 教授)



地域創生部門は県内の様々な産業新機関や自治体と連携し、民間企業等からの技術相談も受け付けている。更に、共同研究や、インキュベーション施設への入居の支援も行っている。学部等と連携し、地域課題解決プログラムやCOC+ 事業にも積極的に関わっている。

▼地域創生部門 HP



活動テーマ と 概要

- 三陸復興の優れた活動の継承と地域創生への転換
- 地域志向研究の促進
- 組織的な産学官連携体制整備と共同研究の推進
- 地域創生モデルの構築
- COC 事業と連携した学生が関わる地域創生活動の促進

代表者 部門長 三陸復興・地域創生推進機構：今井 潤

担当者 部門員 三陸復興・地域創生推進機構：山下 晋、小川 薫、河村 弘之
貫洞 義一

人文社会科学部：浅沼 道成、阿部 裕之、池田 成一、
木村 直弘、栗林 徹、田中 隆充、玉澤 友基、
本村 健太、山本 明彦、小島 聡子

教育学部：長谷川 弓子、平田 光彦、大野 眞男、鎌田 安久、
澤村 省逸、清水 将、溝口 昭彦、上濱 龍也、
清水 茂幸、藁谷 収、金澤 文緒、田中 成行

理工学部：高木 浩一、小山 猛

東日本大震災からの復興で得た知見を基に、岩手発の地域創生モデルの構築を目指す。そのため、組織的な産学官連携を実施するための体制強化と、研究シーズ等を発信することにより、地域創生を担う新たな産業の核となるイノベーションの創出に取り組む。さらに起業およびイノベーション思考人材の育成にも努める。

活動内容

● リエゾン-I マッチングフェア

11月15日(水)に、本学復興祈念銀河ホールとものづくり協創工房において、リエゾン-I マッチングフェアを開催した(参加者約150名)。(株)フォルテ葛西純代表取締役から、「未来を生きて、欠けているものを作ろう」『スタートアップ思考が生み出す社会インパクトの可能性』と題した基調講演を頂いたあと、リエゾン-Iの取り組み紹介、研究開発事業化育成資金昨年度贈呈企業2社(株)モディー、アイカーボン(株)から取り組み紹介の発表があった。その後会場をものづくり協創工房に移し、リエゾン-I 参画機関の研究シーズ41件のポスター発表が行われた。発表者からショートプレゼンテーションも行われ、時間終了まで活発な議論が続いた。



ポスター発表の様子

▼リエゾン-I マッチ



● 地域課題解決プログラム

3月16日に、盛岡市産学官連携研究センター大会議室において平成29年度地域課題解決プログラム成果発表会を行った(参加者約70名)。岩手県内より49件の地域ニーズがあつまり、学内に公募した後、31件の課題が採択され、1年間の研究が行われた。

観光、インバウンド対策、防災、地域づくり、未利用資源活用、障がい者支援など、様々な地域課題に対して、すべての学部の学生が研究に取り組み、その成果を地域に還元した。

▼地域課題プログラム



地域課題解決プログラム



地域課題解決プログラム

● 外部資金獲得支援

地域創生部門において、下記の外部資金獲得支援を実施した。

JST 地域産学バリュープログラム (11 件申請支援、4 件採択)、戦略的基盤高度化支援事業 (サポイン) (3 件支援・採択)、農林水産業・食品産業科学技術研究推進事業 (1 件申請・採択)、「知」の集積による産学連携推進事業のうち研究開発プラットフォーム運営等委託事業 (1 件申請)、産学連携デジタルものづくり中核人材育成事業 (1 件申請・採択)、いわて戦略的研究開発推進事業 (4 件申請、2 件採択)、岩手県地域イノベーション創出研究開発支援事業 (4 件申請、3 件採択)、さんりく基金調査研究事業 (16 件申請、3 件採択)

また、東北経済産業局、東北総合通信局、NEDO、JST、中小企業基盤整備機構による外部資金獲得に向けた岩手大学個別相談会 (1/12) を開催した。(研究者 5 名参加)

更に文部科学省地域イノベーションエコシステムに岩手県と共同申請を行った。

● 共同研究・大型研究プロジェクト進捗管理等

下記の大型プロジェクト等の進捗管理等を実施した。

- ・内閣府戦略的イノベーション創造プログラム
- ・JST マッチングプランナープログラム (報告書支援等、探索試験 6 件、企業ニーズ解決試験 5 件)
- ・戦略的基盤技術高度化支援事業 (3 件)
- ・農林水産業・食品産業科学技術研究推進事業 (2 件)
- ・「知」の集積による産学連携推進事業のうち研究開発プラットフォーム運営等委託事業 (1 件)
- ・いわて戦略的研究開発推進事業 (2 件)
- ・その他受託事業 (岩手県から 2 件)

● 地域科学技術実証拠点 (銀河オープンラボ) 設置準備

平成 28 年 12 月に文部科学省地域科学技術実証拠点整備事業の採択を受け、平成 30 年 3 月の完成を目指し、研究推進機構と連携し、建物整備と試験研究機器の仕様策定などの支援を行った。

大幅に予算が削減されたこともあり、各研究グループの設備調達の調整や、共通部分の備品購入の予算確保、施設名称の決定等を実施した。

更に研究推進機構長の下、銀河オープンラボ設置準備委員会に参画し、運営管理要項、使用に関する取扱規則の作成を行い、施設使用料について案を作成した。



銀河オープンラボ

● 研究室見学ツアー

産学連携研究室ツアー〔10月21日(土) 9:30～12:30〕

ふるさといわて創造協議会新産業雇用創出ワーキンググループ(事務局:COE推進室)と協同で、地域企業等を対象に「産学連携研究室ツアー in 岩手大学不來方祭 2017」を初めて実施した。

本企画は、不來方祭当日に実施されたオープンキャンパスの研究室公開に併せて、地域企業等が各研究室をツアー形式で訪問し、教職員と気軽に話すことで大学の研究に触れ、研究室の今を知っていただくことを目的として実施したものであり、地域企業の役職員等18人の参加があった。

また、後日技術相談や、共同研究に結びついた案件も発生した。

▼ 研究室ツアー



● 学内競争的資金(地域創生モデル構築支援事業)

平成29年度後期から、岩手県内の地域課題に学生が主体的に取り組み、地域からも学びを得る地域創生人材の育成に資すると思われる授業科目(大学院および学部の正規の科目)を対象とし、フィールドワークなどの活動経費を補助することとし、5件の申請があり、審査の結果4件を採択した。

科目名称	教員名
健康づくり運動実習	人文社会学部 浅沼道成教授
学習指導要領とカリキュラム開発	教育学部 田代高章教授
英語インターンシッププログラム/スクールインターンシッププログラム	教育学部 山崎友子教授
臨床心理学地域援助特論	本機構 佐々木誠特任准教授

● 大学発ベンチャー支援および盛岡市産学官連携研究センターの管理運営

平成29年度に設立された岩手大学発ベンチャー企業は下記の2社である。

- ・(株) ライフサポート研究所 福祉介護機器開発 理工学部 佐々木誠准教授
- ・(株) 北上プレス技研 金型製品製造(サポインの成果) 理工学部 清水友治准教授

盛岡市産学官連携研究センターは、設立10周年を迎え、MIUCafeやセミナーなど多くのイベント開催による情報発信を行うことが出来た。4月時点で、14社29室が使用されていたが、4回の審査・評価委員会を実施した後、3月には11社29室と入居企業数が減少した。主に景気の向上で仕事が多くなったものの、人材を確保出来ず、やむを得ず研究開発を中止し、退去する企業が多く見受けられた。

▼ M I U



● 地域創生人材育成に向けた取り組み

(1) 地域創生人材育成に向けた人材育成事業の実施

大船渡市との共同研究により、地域課題からビジネスプランを作成する地域創生人材プログラムを、社会人、高校生向けに実施した。受講生の高校生の2グループが、大船渡ビジネスプランコンテストで、奨励賞を受賞した。

(2) 学生活動センター設置の検討

三陸復興部門と連携し、12月より学生支援組織の設立に向けた検討会を4回実施した。①地域に関わる活動・研究に関心を持つ学生・大学院生、②地域に関わり、継続性を持って活動する学生チーム、③特定の地域プロジェクトに取り組む時限的な学生チームを包括的に支援するプラットフォームとして、NEXT STEP 工房(仮称)を立ち上げ、平成30年度から本格的に活動することとした。

● 新しいシーズ集の作成

研究成果が使用されるシーンを想定したイメージ図を記載することなどにより、地域企業等が抱える技術課題から最適な研究者を容易に探し出せる「産学連携シーズ集」(掲載研究者 57 名)を製作した。なお、各研究者に関する記載については、当該研究者の研究成果のみを紹介するのではなく、研究室全体の取組を紹介することにより、幅広い分野のニーズにマッチングできるように工夫している。また、本学保有特許の有効活用と特許情報をきっかけとした共同研究等へつなげるため、研究シーズ動画(4 本)や、「オープン特許集」(掲載特許 28 件)を製作しイベント等において PR を行った。

また WEB での公開も始めた。<http://www.ccrd.iwate-u.ac.jp/seeds/index.html>

▼ 技術課題



● 宮沢賢治センター定例研究会や記念フォーラムの開催

- ・平成 29 年度の定例研究会は、第 94 回(5 月 19 日) 第 95 回(7 月 21 日) 第 96 回(9 月 29 日) 第 97 回(11 月 28 日) 第 98 回(2018 年 1 月 26 日) に開催し平均で 28 名の参加者を集めた。
- ・平成 29 年度研究力強化支援経費の交付を受け、宮澤賢治卒業 100 年記念フォーラムを農学部附属農業教育資料館および宮沢賢治学会イーハトーブセンターと共同で開催(2018 年 3 月 24 日)、150 名と満員の聴衆を集め、またマスコミ各社の取材があり、IBC は、昼のニュース(3 月 25 日)、および 3 月 27 日の晩のローカル・ニュース(「ニュース・エコー」で 3 分ほどの特集)、岩手日報 3 月 28 日 21 頁(文化欄)、盛岡タイムス 3 月 29 日 6 頁で、それぞれ写真付きで大きく報告記事が掲載された。

▼ 記念フォーラム開催



賢治フォーラム

▼ 宮沢賢治センター

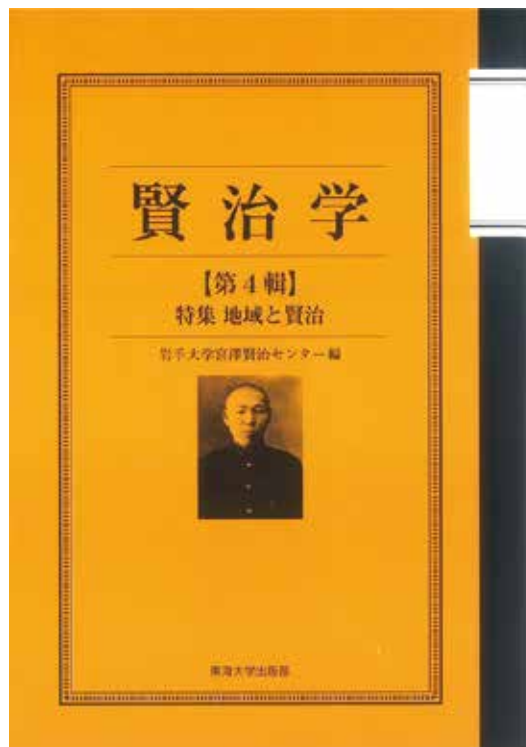


実践領域			教育研究領域			
三陸復興部門	地域創生部門	生涯学習部門	ものづくり技術 教育研究部門	三陸水産 教育研究部門	地域防災 教育研究部門	平泉文化 教育研究部門

● 『賢治学』の編集・刊行

- ・昨年度に編集を終了した『賢治学』第4輯を東海大学出版部より2017年7月20日に刊行した。内容は、第4輯に寄せて、特集「地域と賢治」（地域創生フォーラム講演1本＋論考4本）、コラム「それぞれの賢治」（エッセイ4本）、宮澤賢治センター研究例会より（論文1本）、フォーラム「賢治学」（論文5本）、編集後記で、総222頁、ISBN：978-4-486-02152-0。
- ・続いて年度内に『賢治学』第5輯を編集し終え、翌年度平成30年7月25日に東海大学出版部から刊行。内容は、第5輯に寄せて、特集「賢治学の現代的展開」（地域創生フォーラム講演1本＋論考2本＋エッセイ1本）、コラム「それぞれの賢治」（エッセイ2本）、宮澤賢治センター研究例会より（論文3本）、フォーラム「賢治学」（論文5本）、編集後記で、総206頁、ISBN：978-4-486-02177-3。

▼ 賢治学



賢治学

【平成30年度の活動予定】

特任教授を採用し、地域創生モデル構築のための検討会を立ち上げるとともに、機構の組織改革に向けた検討も同時に進める。更に地域創生人材育成のため、NEXT STEP 工房の立ち上げを支援するとともに、人材育成の方向性について検討する。

地域企業との産学官連携や、地域創生の取り組みのため、協定締結自治体との意見交換会を実施するとともに、産学連携シーズ集や研究シーズ動画を充実させ、県内企業との共同研究件数の増加などを目指し、研究の紹介の機会を増加させる。

銀河オープンラボに入居している研究グループを中心に、オープンイノベーションの取り組みを県内外の企業と進め、社会実装を目指す研究開発拠点の整備を行う。

(3) 生涯学習部門

部門長 朴 賢淑（三陸復興・地域創生推進機構 准教授）



生涯学習部門では岩手大学の「地域社会に開かれた大学」の理念の基、公開講座、社会教育主事講習、社会人学び直しプログラムなどを開講し、地域住民を対象に様々な学びの機会を提供することで大学の教育研究の成果を社会に還元している。近年、経済のグローバル化や社会変化に伴い人々の価値観も変化しており、成人学習者の関心も身近な課題から社会的課題へと移行しつつある。こうした状況を鑑み生涯学習部門では、多様な成人学習者のニーズにあった生涯学習プログラムの充実化を目指している。また、成人学習者が「学びをほどこき、編みなおす力」、「地域で生かす力」、「学び続ける力」などを身に付け、地域活動や職業生活で約立てることによって地域の生涯学習の振興を目指している。

活動テーマ と 概要

- ・ 社会人学び直しプログラムの開発
- ・ 地域課題セミナー（がんちゃんの学び）
- ・ 社会教育主事養成
- ・ 公開講座

代表者 三陸復興・地域創生推進機構：部門長 朴 賢淑

学内外との連携による生涯学習プログラムの開発に重点を置きながら地域住民のニーズを反映した社会人学び直しプログラムの開発を中心に行った。また、岩手大学が進めるべき社会人学び直しプログラムの在り方を検討するために、シンポジウムの開催をとおして岩手大学の取り組みを全国に発信することができた。

実践領域			教育研究領域			
三陸復興部門	地域創生部門	生涯学習部門	ものづくり技術 教育研究部門	三陸水産 教育研究部門	地域防災 教育研究部門	平泉文化 教育研究部門

活動内容

● 生涯学習基盤づくり

生涯学習部門員を学内の4学部の教員で構成することで学内における連携を強化し、月1回部門会議を開催することで生涯学習部門の取り組みについて情報共有することが可能となった。

また、岩手県立生涯学習推進センターが開催する事業に積極的に参加してコメントするなど、行政とも連携を取ることで、岩手県全体を視野に入れた生涯学習基盤づくりのための組織・環境づくりを進めている。岩手県は人口に対し土地が非常に広く、全ての地域への均等な教育機会の提供が課題となっていることから各市町村の社会教育施設と連携し、遠隔教育システムの導入を検討している。

● 社会人学び直しプログラムの開発

地域ニーズにあった新たな社会人学び直しプログラムの開発のために調査・研究を行っている。今年度からは、4学部から5名の教員を生涯学習部門会議のメンバーに加え協議を重ねてきた。

また、平成28年度から始めた社会人学び直しシリーズ講習の「がんちゃんの学び」を今年度も実施した。今年度は「地域課題」をテーマとして、受講者に地域課題を再考し、解決策を共に考える機会を提供することができた。

さらに、従来の公開講座を検討・再分類することによって地域に密着したプログラムを提供することができた。

● 学内社会人学び直しプログラムの整理と連携

地域ニーズにあった社会人学び直しプログラムを開発するために学内既存プログラムの整理と地域の学習ニーズの調査を並行して進めた。学内の諸プログラムの実施担当者とのミーティングを通して、受講者の確保が共通の課題であることが明らかになった。

一方、プログラムに参加した受講生を対象に実施したアンケート調査では、「非常にいい取り組みであるのでより多くの人に知らせたい」といった意見もあり、プログラムの広報が不十分である可能性もあるとし、生涯学習部門のホームページ、冊子を通して岩手大学で行っている社会人学び直しプログラムの広報に力を入れた。

● 地域住民の生涯学習ニーズ調査

地域ニーズにあったカリキュラムを提供するため、地域住民を対象にアンケート調査を行った。その結果、年齢構成は20代から70代まで幅広く、年齢代によって、学習ニーズ、学習を行う時間において違いがみられた。なお、アンケートの結果は、平成29年度生涯学習部門成果報告書を参照されたい。

● いわてアグリフロンティアスクールとの連携事業

学内の既存の社会人学び直しプログラムとの連携を図るために各プログラムの担当者、学部長との意見交換を通して各プログラムの現状と課題を共有することができた。さらに生涯学習部門では課題の一つであるコンピューター講座を開講することによって、いわてアグリフロンティアスクールの受講生への学習支援を行った。

講義終了後のアンケート調査では、講義について概ね「満足・やや満足」の評価を得たが、講習時間が短い、練習時間が少ないなどの課題も明らかになった。



コンピューター講座の様子

● 総合科学研究科との連携事業

岩手大学では自然科学、人文科学、社会科学等の専門知識に基づきながら、文理の枠を超えた幅広い視野を持って新たな価値を創造し、持続可能な社会の実現に向けて地域社会や地球規模の課題解決に貢献する人材を育成するため、平成29年4月から全学の大学院修士課程と博士前期課程の研究科を統合し、総合科学研究科（修士課程）を設置している。幅広い人々に総合科学研究科の取り組みを知ってもらうため、共通科目授業の一部である「地域創生特論」、「地域文化特論」、「先端生命科学特論」、「グローバル環境科学特論」の4科目、8講義を地域住民に公開した。

生涯学習部門では、従来の公開講座での経験を活かし、授業公開の受講者募集、アンケート調査を行い、授業評価と共に社会人の学習ニーズに関するデータ構築を試みた。アンケート調査結果については、平成29年度生涯学習部門成果報告書を参照されたい。

岩手大学
大学院総合科学研究科共通科目授業公開

岩手大学は今年4月に大学院修士課程（人文社会科学研究科、農学研究科）と博士前期課程（工学研究科）の研究科を統合し、総合科学研究科を設置しました。総合科学研究科の教育の特色の1つとして、全専攻学生を対象とした研究科共通科目を設置しています。このたび、大学院の授業を企業等にお勧めの方をはじめとする一般市民の方々に広く知っていただくために一部の研究科共通科目を公開することといたしました。この機会にぜひ岩手大学へお越しいただき、授業をご参観くださいますようお願い申し上げます。

- ◆ 日 時：平成29年11月17日（金）
- ◆ 受講対象者：一般市民
- ◆ 公開授業一覧

申し込み不要
受講料無料

開催時間	科目名	授業内容	担当講師	研究分野
14:45~16:15	地域創生特論	【地域創生の胎動】	廣田 純一教授	農業土木学・農村計画学
		地域創生に関する実際の取り組みを具体例をもとに解説	五味 社平教授	情報学 数理物理・物性基礎
16:30~18:00	地域文化特論	【岩手の暮らしと文化】	高橋 宏一教授	人文地理学
16:30~18:00	先端生命科学特論	【におい、フェロモンを感じる動物の嗅覚メカニズム】	宮崎 雅雄准教授	フェロモン
		においやフェロモンを受容する動物の嗅覚システムについて解説		嗅学 タンパク質 動物行動 生化学
16:30~18:00	グローバル環境科学特論	【自然環境と減災】 自然災害から人命や財産を守るための知識・技術や災害に強い地域づくりについて学ぶ	井良沢 道也教授	林学・森林工学

◆ 受講料：無料

◆ お問合せ先：岩手大学 学務部 大学院・専門教育課 総合科学研究科グループ
TEL:019-621-6603 E-mail:gsenko@iwate-u.ac.jp

◆ 受講受付：学生センターA棟1階5番窓口（授業資料・講義室案内）
（裏面の地図をご参照ください）

☆岩手大学における社会人学び直しプログラム開発のため、三陸復興・地域創生推進機構生涯学習部門のアンケート調査へのご協力をお願い致します。

総合科学研究科授業公開ポスター

● 地域課題シリーズセミナー「がんちゃんの学び」の開催

地域住民のニーズの多様化・高度化に対応した環境整備とともに、地域の課題に対応できる人材育成プログラムの開発を行った。その一環として平成 29 年度は、地域の課題を再考するため、各実践分野で活躍している方々を講師として招き、シリーズセミナー「がんちゃんの学び」を 6 回開講した。セミナーでは実践者の活動についてご紹介いただくことで、地域の課題を共有し、ディスカッションを踏まえて参加者と地域課題の解決策について議論を深めることができた。

また、参加者を対象にアンケート調査を行うことで地域学習者の学習ニーズを把握することができた。参加者からは「(地域課題について) 視野が広がった」、「岩手県についての情報を得ることができた」、「岩手大学の成人向けプログラムを知ることができた」など、コメントをいただくと同時に、多数の要望・意見も出ており、次年度の事業計画に生かすこととした。



地域課題シリーズセミナーの様子

岩手大学 三陸復興・地域創生推進機構生涯学習部門

がんちゃんの学び

一緒に考えよう
地域の課題

5 月 9 日の参加も歓迎しますが、資料準備のため、各セミナーの前日までご予約をお願いします。

フードバンクってなあに? 12月6日【水】 13:30~15:30	そは屋の働き⇒地域づくり 12月13日【水】 13:30~15:30
外国人子ども×学習支援 1月10日【水】 13:30~15:30	地域の子ども×地域の大人 1月17日【水】 13:30~15:30
中国における地域課題 1月24日【水】 13:30~15:30	地域教育力とは 1月31日【水】 13:30~15:30

岩手大学生涯学習部門 特任研究員

がんちゃんの学びシリーズポスター

● 社会人学び直しシンポジウムの開催

部門事業の主な柱の一つとして社会人学び直しプログラムの開発を掲げており、平成 29 年度は学内ですで行われている社会人学び直しプログラムの連携に力を入れた。そこで、シンポジウム「地方国立大学における社会人受け入れの現状と課題」を開催し、各プログラムについて紹介することで、課題を確認するとともに社会人学び直しにおける大学への期待を踏まえ、今後の推進策を検討した。

シンポジウムでは、全国から参加した大学関係者と大学における社会人学び直しの政策の動向及び実践場面における現状と課題を共有するとともに、議論を深めることができた。



社会人学び直しシンポジウムの様子

岩手大学 三陸復興・地域創生推進機構 社会人学び直しシンポジウム

社会人学び直しシンポジウム

地方国立大学における
社会人受け入れの現状と課題

2018年2月5日(月) 受付13:30~
15:30 岩手大学 復興祈念銀河ホール
定員 100名

入場料 無料

申込は2月1日迄まで

受付: 13:30~
13:30~14:15 開会式 開会式
14:15~14:55 講演 講演
14:55~15:10 休憩 休憩
15:10~15:20 講演 講演
15:20~15:30 21世紀ものづくり人材若手マイスター育成の取り組みについて
15:30~16:00 講演 講演
16:00~16:30 講演 講演
16:30~17:00 講演 講演

岩手大学 生涯学習 | 生涯学習部門 | 社会人学び直しプログラムの開発について

社会人学び直しシンポジウムポスター

● 公開講座の実施

生涯学習部門では地域に密着した社会貢献を目指しており、大学の研究成果を広く社会に還元するため全学で開講する公開講座を取りまとめ、実施経費の支援、受講者募集、成果報告を行っている。平成29年度も学内公募を通して、「語学・文学」、「スポーツ」、「芸術」、「農学」、「理工学」など幅広い分野の18講座を開講することができた。また講義の質向上のため講習終了後受講者にはアンケート調査を行うと共に授業担当者には活動報告書を提出してもらった。アンケート調査の結果及び活動報告は、平成29年度生涯学習部門成果報告書を参照されたい。なお、平成30年度開講予定の公開講座は下記の表の通りである。

▼ 平成30年度
公開講座一覧



	講座名	開催日時	対象者	募集人数	受講料	講義概要	
自然観察・牧場体験	フィールドセミナー 春の植物観察会	2018年6月3日(日) 10:00~12:30	市民一般	15人	無料	滝沢演習林敷地内で不伐の森等を散策し、開葉期を迎えた春の樹木の観察と森林管理についての講話を通して、理解を深めていただきます。	
	哲学者 内山 節 氏を迎えての 第13回「哲学の森」	2018年8月18日(土)~19日(日) 18日/13:30~17:00 19日/8:30~12:00	市民一般 (高校生以上)	30人	無料	滝沢演習林に哲学者内山節氏をお迎えし、森の中でこれからの社会や地域づくりのあり方などについて講演いただくとともに、森林散策・意見交換の機会を設け、様々な考える場を提供します。	
	牧場体験「子牛の誕生?トラクタに乗ろう」	2018年9月22日(土)~23日(日) 22日/13:00~23日/13:30	小学生以上の親子	25人	1,100円	岩手大学御明神牧場にて、牛の分娩を観察、農業機械を体験し、農業への理解、関心を持っていただきます。	
	フィールドセミナー 秋の植物観察会	2018年9月30日(日) 10:00~12:30	市民一般	15人	無料	滝沢演習林敷地内で、樹木観察や不伐の森等の散策を通して秋の森の様子を観察してもらい、理解を深めていただきます。	
	フィールドセミナー ウォッチングビンゴをしながら親子で楽しむ秋の森	2018年11月11日(日) 9:30~12:30	市民一般	20人	無料	滝沢演習林でウォッチングビンゴをしながら森の樹木、草木、虫、鳥などを観察するセミナーを開催し、秋の森の様子、生き物の姿について理解を深めていただきます。	
	かんじきを歩いて冬の森を歩こう	2019年2月17日(日) 13:00~15:30	市民一般	20人	無料	かんじきを履いて冬の滝沢演習林を散策し、自然観察・アニマルトラッキングなどを行います。冬の森林と親しむことを通じて、森林保全に関わる理解の深化を図ります。	
フィールドセミナー 春をむかえる森をみる	2019年3月24日(日) 9:30~12:00	市民一般	20人	無料	滝沢演習林で冬越しをすませた森の生きものを観察し、春を迎える森の様子、生きものの姿について理解を深めていただきます。		
獣医学	半日獣医学学生体験 〜獣医学科はどんな勉強をしたらいい?〜	2018年6月~7月の土曜日 または日曜日を予定 13:00~16:00	中・高校生、 市民一般	100人	無料	基礎系、臨床系、応用系の科目の模擬講義を開講し、中高生にもわかりやすく説明します。また、実習の現場を見ていただけるように、普段目にすることの出来ない附属動物病院や病理標本室などのバックヤードツアーを開催します。	
農学	農学部5学科(植物生命科学科・応用生物化学科・森林科学科・食料生産環境学科・動物科学科)の実験講座	2018年6月30日(土) 13:00~17:00	高校生および 高校教員	80人	無料	本講座を通して、教科書では得られない実験・実習の面白さや、農学の興味と関心をもってもらうと同時に、それぞれの進路の参考になることを期待します。	
スポーツ	岩大スポーツアカデミー 2018 コーチのためのサッカーC	2018年7月~9月 9:00~18:00	18歳以上 (高校生不可)	30人	12,000円 ※別途 教材費あり	サッカーの指導ととりわけ小学生の指導に携わろうとする方に対して、サッカーの技術・指導法・その他サッカーに関する幅広い情報を提供し、指導力向上を目指して開講するものです。 また、本講座を修了・資格検定審査に合格し所定の手続きを経た方には、岩手県サッカー協会より、(公認)日本サッカー協会公認「C級サッカーコーチ」、「D級サッカーコーチ」の資格を与えるものとします。	
	岩大スポーツアカデミー 2018 コーチのためのサッカーD	2019年2月を予定 9:00~18:00			7,000円 ※別途 教材費あり		
	岩大スポーツアカデミー 2018 少年少女のためのバスケットボール	2018年8月1日~3日 1日:17:00~18:00 2、3日:16:00~18:00	小学4年生~ 6年生	30人	無料		バスケットボールを愛し、学びたい少年少女に対し、レベル・目的に応じたプログラムを提供し、資質の向上を目指し開講します。
	岩大スポーツアカデミー 2018 少年少女のための陸上競技	2019年1月末~2月中旬を予定 9:30~12:00	小学3年生~ 6年生	100人	無料		陸上競技を愛し、学びたい少年少女に対して、基本技術の習得と冬季トレーニングなどについて、レベル・目的に応じたプログラムを提供し、資質の向上を目指し開講します。
地域	地域政策入門 一生活と経済・環境一	2018年7月28日(土) 13:30~16:30	高校生、 市民一般	50人	無料	新設した地域政策課程での教育内容の一端を紹介し、広く本課程を知っていただくことを目的として開催します。本年度も地域政策に関するテーマを設定し、法学・経済学・環境学の3分野から話題を提供します。	
理工学	あなたは下戸(げこ)?それとも虜蛇(うわばみ)? 〜DNA鑑定を用いた実験教室〜	2018年秋の週末(1日)を予定 10:00~17:00	市民一般 (高校生以上)	8人	無料	ヒトのアルコール飲料に対する強さは遺伝的に決まっており、PCR-RFLP(ポリメラーゼ連鎖反応-制限酵素断片長多型)分析というDNA鑑定法により、アルコールを摂取しなくても、強い弱いかわかることができます。本プログラムでは、参加者の皆さん自身のDNAのPCR-RFLP分析を通して、生命科学の基礎技術がどのように応用されているかを体験していただきます。	
	ニワトリ胚を用いた研究は、ライフサイエンスに どのような貢献をしてきたか(ニワトリ初期胚の観察会)	2018年8月25日(土) 予定 11:00~12:30 予定	市民一般	30人	無料	ニワトリ胚を用いた研究の歴史を解説した後、主に基礎的分野に焦点を当てつつ、最新の研究成果をわかりやすく説明します。また、講演に引き続き、ニワトリ初期胚の観察会も行います。本講座は大船渡カメリアホールを会場に、子供から大人まで幅広い方を対象に開講します。	

平成30年度 公開講座一覧(予定)

● 社会教育主事養成

生涯学習部門では、地域の社会教育の担い手となる専門的職員－社会教育主事の養成を行っている。文部科学省の委託事業である社会教育主事講習は、北東北の岩手県・青森県・秋田県の学習者を対象に岩手大学、弘前大学、秋田大学が持ち回りで開講している。

平成29年度は岩手大学が主催校なり、各大学、各県の教育委員会と連携を取り、学内外の教員の協力のもとで実施した。なお、講習は4週間の集中講義の形式で、4科目(9単位)開講した。

受講者は、岩手県(18名)、秋田県(11名)、青森県(11名)から40名が参加し、全員修了することができた。



社会教育主事講習



授業の様子

平成29年度 社会教育主事講習日程表

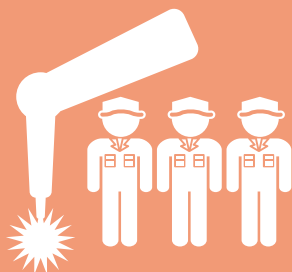
会場	期日	8:50～10:20	10:30～12:00	13:00～14:30	14:40～16:10	16:30～18:00
青少年立 交流手山 家	7月18日 (火)		12:00～ 受付	13:10～13:40 開講式 13:45～14:30 オリエンテーション	社会教育と生涯学習 岩手大学 准教授 朴 賢淑(生涯学習概論①)	社会教育演習① 新妻・浅沼・朴
	7月19日 (水)	社会教育と市民活動 岩手大学 准教授 朴 賢淑(生涯学習概論①)	岩手県の生涯学習振興と課題 岩手県生涯学習振興会 会長 中村 利之(社会教育特講①)	社会教育演習② 新妻・浅沼・朴	社会教育演習③ 新妻・浅沼・朴	社会教育演習④ 新妻・浅沼・朴
	7月20日 (木)	地域の国際化と社会教育 岩手大学 准教授 朴 賢淑(社会教育特講②)	生涯学習と企業連携 岩手大学 教授 今井 潤(社会教育特講③)	生涯学習と地域スポーツ 岩手大学 教授 浅沼 道成(生涯学習概論②)	社会教育演習⑤ 浅沼・朴	
	7月21日 (金)	社会教育対象の理解 岩手大学 准教授 朴 賢淑(社会教育計画①)	社会教育演習⑥ 朴	高齢化と社会教育(社会教育特講④) 八幡平市企画財政課 関 貴之 オーフェアールド八幡平山下 直基		
会場	期日	9:00～10:30	10:40～12:10	13:10～14:40	14:50～16:20	16:30～18:00
岩手大学 図書館 生涯学習・ 多目的学 習室	7月24日 (月)	社会教育と市民活動 岩手大学 准教授 朴 賢淑(社会教育特講⑤)	社会教育演習⑦ 浅沼・朴	社会教育事業計画 東北大学 教授 高橋 満(社会教育計画②)	社会教育調査の理論と方法Ⅰ 岩手大学 教授 竹村 祥子(社会教育計画③)	社会教育調査の理論と方法Ⅱ 岩手大学 准教授 小野澤 章子(社会教育計画④)
	7月25日 (火)	国際理解教育と生涯学習 岩手大学 准教授 尾中 夏美(社会教育特講⑥)	高等教育と生涯学習 東北大学 助教 清水 禎文(生涯学習概論④)	学校外教育論 弘前大学 講師 深作 拓郎(生涯学習概論③)	社会教育演習⑧ 新妻・浅沼・朴	社会教育演習⑨ 新妻・浅沼・朴
	7月26日 (水)	地域農業の問題と社会教育 岩手大学 教授 佐藤 和憲(社会教育特講⑦)	社会教育演習⑩ 浅沼・朴	生涯学習社会における学力 東北大学 講師 田中 光晴(社会教育特講⑤)		
	7月27日 (木)	社会福祉と社会教育 大阪府教育委員会 スクールソーシャルワーカー 上原 裕介(社会教育計画⑥)	社会教育演習⑪ 浅沼・朴		地元学と社会教育 岩手大学 教授 廣田 純一(生涯学習概論⑤)	社会教育演習⑫ 新妻・浅沼・長谷川・朴
	7月28日 (金)	地域社会教育計画Ⅰ 岩手大学 客員教授 新妻 二男(社会教育計画⑤)				
	8月1日 (火)	文化財の理解と生涯学習 岩手大学 教授 敷 敏裕(社会教育特講⑩)	生涯学習とまちづくり 岩手大学 准教授 杭田 俊之(社会教育特講⑪)	地域社会教育計画Ⅱ 弘前大学 准教授 松本 大(社会教育計画⑦)		
	8月2日 (水)	社会教育演習⑬ 浅沼・朴	地域復興と行政の役割 金石市観光振興部企業立地課 主任 井上 諭直(社会教育特講⑫)	震災復興と地域づくり 岩手大学 教授 五味 壮平(社会教育特講⑬)	社会教育演習⑬ 新妻・浅沼・長谷川・朴	社会教育演習⑭ 新妻・浅沼・長谷川・朴
	8月3日 (木)	社会教育施設として「美術館」 岩手大学 教授 藁谷 収(生涯学習概論⑥)	社会教育演習⑭ 浅沼・長谷川・朴	生涯学習と社会教育施設 青森県立保健大学 講師 廣森 直子(生涯学習概論⑦)	男女共同参画社会と女性労働	
	8月4日 (金)	社会教育演習⑮ 新妻・浅沼・朴	社会教育演習⑮ 新妻・浅沼・朴	社会教育演習⑯ 新妻・浅沼・朴	社会教育演習⑯ 新妻・浅沼・朴	社会教育演習⑰ 新妻・浅沼・朴
	8月7日 (月)	震災復興とコミュニティ作りへの取り組み 岩手大学 特任研究員 船戸 義和(社会教育特講⑭)	生涯学習と教育制度 東北大学 准教授 後藤 武敏(社会教育特講⑮)	社会教育演習⑱ 渡部 芳栄(社会教育特講⑯)		社会教育演習⑱ 朴
	8月8日 (火)	貧困問題と子ども支援 特定非営利活動法人インクルいわて 山屋 理恵(社会教育特講⑰)	社会教育演習⑲ 新妻・浅沼・朴	社会教育演習⑲ 新妻・朴	社会教育演習⑲ 新妻・朴	社会教育演習⑲ 新妻・朴
	8月9日 (水)	社会教育演習⑲ 新妻・浅沼・朴	社会教育演習⑲ 浅沼・朴	生涯学習と人間形成 秋田大学 准教授 小池 孝範(生涯学習概論⑧)		社会教育演習⑲ 浅沼・朴
	8月10日 (木)	社会教育演習⑲ 新妻・浅沼・朴	社会教育演習⑲ 新妻・浅沼・朴	13:00～ 閉講式		

【平成30年度の活動予定】

1. 地域住民のニーズにあった社会人学び直しプログラムを開発するため、既存の公開講座を再分類し、支援体制を整える。
2. 活動の成果をシンポジウムの開催、学会での発表、報告書にまとめるなどで情報発信する。
3. 平成30年度も北東北の主催校として社会教育主事講習を平成30年7月17日から8月9日までの間で実施する。講習では生涯学習概論、社会教育計画、社会教育演習、社会教育特講の4科目(9単位)を開講する。
4. 北東北三県の大学・社会教育担当者と連携を取りながら、遠隔教育システムの導入を視野に入れた生涯学習プログラムの開発研究を行う。

(4) ものづくり技術教育研究部門

部門長 平塚 貞人 (理工学部 教授)



ものづくり技術教育研究部門は、地域ニーズに対応した金型、鋳造、複合デバイス分野における先端的水準の研究成果を基に、地域ニーズに対応した金型、鋳造、複合デバイス分野における高度専門技術者の育成のためのものづくり講演会、講習会、セミナーなどの取り組みを進めている。

活動テーマ と 概要

ものづくり技術の人材育成セミナーと講演会の開催

代表者 理工学部：平塚 貞人

担当者 理工学部：長田 洋、鎌田 康寛、恒川 佳隆、西館 数芽、西村 文仁、平原 英俊、廣瀬 宏一、藤代 博之、本間 尚樹、水本 将之、八代 仁、吉本 則之、叶 榮彬、内館 道正、柴崎 祐二、清水 友治、土岐 規仁、晴山 巧、吉野 泰弘、吉原 信人、脇 裕之、福江 高志、村岡 宏樹

岩手のものづくり教育研究において、地域のニーズに対応した金型、鋳造、複合デバイス分野における高度専門技術者の育成のためのものづくりセミナーと講演会を開催した。

活 動 内 容

● ものづくり技術研究センター 特別講演会の開催

11月22日(水)に本学復興祈念銀河ホールで九州工業大学名誉教授の鈴木裕先生より「3Dプリンターの最新技術」と題して、3Dプリンターを用いた積層成形技術、熱可塑性CFRP部材の自動車への適応例などの内容が紹介された。株式会社ナニワ炉機研究所の村田博敏氏より「鋳造技術とは」と題して、鋳鉄の溶解技術、鋳造における環境・エネルギー問題への取り組み、バイオコークス技術などの内容が紹介された。



講演する鈴木裕氏



講演する村田博敏氏

実践領域			教育研究領域			
三陸復興部門	地域創生部門	生涯学習部門	ものづくり技術 教育研究部門	三陸水産 教育研究部門	地域防災 教育研究部門	平泉文化 教育研究部門

● ASIA JOINT SYMPOSIUM 2017 の開催

10月18日～19日に大連理工大学と共催でASIA JOINT SYMPOSIUM 2017が開催された。その産学連携国際シンポジウムセッションの中で、「工業、金型ものづくり、農業、学生交流」をテーマに、岩手大学でのものづくり技術教育と研究についての講演と日本、中国、韓国の産学連携についての講演会が開催された。



開会のスピーチ



講演発表（金型・鋳造分科会）の様子

● 金型技術研究センター特別講演会の開催

6月9日（金）に岩手大学において、日本工業大学の横田悦二郎教授より「金型産業の過去と未来」と題して、最新の金型技術、アジアにおける金型技術の現状、今後の金型加工技術のポイントについて講演された。

● 金型技術研究センター講演会の開催

6月30日（金）に本学共用教育研究棟において、日本端子(株)の佐藤秀樹氏より「3代目社長は会社をつぶすのか」と題して、企業における金型技術の歴史と金型製品に要求されるのも、企業の生き残りについて講演された。

● 金型技術研究センター特別講演会の開催

7月25日(火)に本学金型技術研究センターにおいてアルプス電気(株)技術顧問谷本勲氏より「伊達政宗は宮城県に何を残したか～我々は沃土の民になっていないか～」と題して、講演会が開催された。



講演する谷本勲氏

● 鋳造技術研究センター特別講演会の開催

6月9日(金)に本学共用教育研究棟において、北光金属工業の大月栄治氏より「日本の人口は、減少に転じ、ものづくりは変革を迫られている。今がチャンスだ。」と題して、今後の鋳造技術と動向、生き残りについて講演された。



講演する大月栄治氏

● 鋳造技術研究センター講演会の開催

6月21日に、水沢サンパレスホテルにおいて、美和ロック(株)前工場長の山田元氏より「失敗に教えてくれたこと」と題して、鋳造におけるものづくりの難しさ、楽しさについて講演会が開催された。

● 鋳造技術研究センター特別講演会の開催

8月3日(木)に本学鋳造技術研究センターにおいて、室蘭工業大学の清水一道教授より「鋳物シンジケート(鋳物大量受注も広域共同生産ネットワーク構築プロジェクト)の取り組み」と題して、企業における鋳物受注のためのネットワーク構築の仕組みについての講演会が開催された。

● 生産技術研究センターシンポジウムの開催

8月28日(月)にホテル千秋閣で農業と電子技術のコラボレーションー農工連携の最前線をテーマに、農研機構東北農業研究センターの長坂善禎氏より「大規模農業でのICT利用」と題して、(株)ネクスグループの秋山司氏より「テクノロジーで日本の未来を変えていく～NCXXFARMのご紹介～」、諏訪東京理科大学の渡邊康之教授より「農業と太陽光発電を両立！ 発電するビニールハウスの開発」と題して、本学農学部の武田純一教授より「果樹園作業用ロボットの開発について」と題してシンポジウムが開催された。



シンポジウムの様子



講演する長坂善禎氏



講演する秋山司氏



講演する渡邊康之氏



講演する武田純一氏



パネル展示の様子

● 三陸復興プロジェクト高度ものづくり人材育成セミナーの開催

被災した三陸沿岸地域の復興推進の取組の一つとして、3月29日に釜石市内で、「地域イノベーション事業における金型・鋳造・生産技術分野の成果」についてのセミナーが開催された。



講演する廣瀬宏一氏



講演する長田洋氏

【平成30年度の活動予定】

岩手のものづくり教育研究において、地域のニーズに対応した金型、鋳造、複合デバイス分野における高度専門技術者の育成のためのものづくりセミナーと講演会を開催する。

(5) 三陸水産教育研究部門

部門長 田中 教幸 (農学部 教授)



三陸水産教育研究部門は、三陸水産研究センターが担当する研究開発と大学教育による人材育成を主なミッションとする。平成28年度に開講された農学部食料生産環境学科水産システム学コースの学生教育を行うとともに、生産から加工、流通、販売システムモデルの構築を目指し、そのノウハウの普及と継続的なイノベーションの基盤整備に取り組む。

▼ 岩手県水産
技術センター



活動テーマ と 概要

岩手県沿岸における水産資源の持続的利用と新たな漁業生産体制構築を目指した東日本大震災からの復興支援

代表者 農学部：田中 教幸

担当者 人文社会科学部：竹原 明秀、田中 隆充、横山 英信、寺崎 正紀
教育学部：梶原 昌五

理工学部：梅田 輝之、高木 浩一、萩原 義裕、廣瀬 宏一、船崎 健一、
伊藤 歩、小野寺 英輝、三好 扶、吉野 泰弘、石川 奈緒、
福江 高志、松林 由里子

農学部：平井 俊朗、上村 松生、三浦 靖、山下 哲郎、後藤 友明、
石村 学志、袁 春紅、伊藤 幸男、伊藤 芳明、塚本 知玄、
濱上 邦彦、山田 美和、塚越 英晴

三陸水産研究センター：北村 志乃、佐藤 琢哉

三陸復興支援課：田村 直司

学術・地域貢献・人材育成による震災後の持続的な三陸水産業復興に増殖分野から貢献することを目的として、(1) 資源の持続的利用 (2) 水産資源増殖の高度化による新たな漁業生産体制の構築を主要なテーマとして掲げ、関連する様々な外部資金を活用しながら関連機関の協力を得て三陸復興・地域創生推進機構の活動を進めている。

活動内容

● 東日本大震災後の三陸沿岸域における魚類相と主要魚種の加入動態把握【増殖分野】

野田湾と大槌魚類採集調査を行い、震災以前を含む過去のデータとの比較から魚類相の特徴を調べた。調査結果から、両湾で種数の増加と密度の増大が認められた。本海域で優占する漁業資源であるヒラメ当歳魚とマコガレイ当歳魚の平成29年度における密度は、ヒラメでは野田湾が低水準、大槌湾が平均的な水準であったのに対し、マコガレイでは平成25年に次ぐ高い水準であった。大槌湾を対象として魚類相と優占種の胃内容物組成、底生生物組成を比較したところ、ヒラメ稚魚ではアミ類の分布密度の変動とは連動しておらず、魚類やエビジャコを代替餌料として利用していること、マコガレイ稚魚では日和見的に底生生物を利用していることが明らかとなった。



加入動向調査

● 遡上全期にわたるサケの網羅的遺伝特性解析【増殖分野】

三陸における重要な水産資源であるサケは、近年続いている不漁原因の究明が喫緊の課題となっているが、岩手県のサケを対象とする遺伝学的な分析はほとんど行われておらず、遺伝的要因の資源変動への影響を把握する必要がある。本研究は、三陸沿岸河川を代表する津軽石川と大槌川をモデル河川とし、昨年度に引き続き遡上全期にわたるサケの遺伝特性を調べた。平成29年度の結果においても各集団内の遺伝的多様性は津軽石川前期群で高く、津軽石川後期群と大槌川後期群の遺伝的多様性はほぼ同レベルであった。また、津軽石川の前期群と両河川の後期群の間では遺伝的に分化している可能性があった。津軽石川と大槌川の同旬の集団は近縁関係にないことから、異なる集団組成であることが示唆された。



サケの網羅的遺伝特性解析

● 三陸の貝類養殖漁業に大きな被害をもたらす外来種ヨーロッパザラボヤの生態学的研究【増殖分野】

三陸のホタテガイ等二枚貝養殖で東日本大震災以降深刻な問題の一つとなっている外来性ホヤ類の一種であるヨーロッパザラボヤの基礎的な生物学的特性把握を目的として、フィールドでの調査と飼育試験による付着と成熟特性の把握を行った。フィールドでの新規付着基質を用いた調査から、本海域におけるヨーロッパザラボヤの付着には季節性が認められ、6月に増加することがわかった。飼育試験と組織切片を用いて産卵と性成熟の水温変化との関係を調べたところ、ヨーロッパザラボヤの産卵は水温変化に呼応して行われる特性を有しているが、水温低下が進むと性成熟が停止するために産卵が行われなくなることがわかった。



ヨーロッパザラボヤ

● 定置網におけるクロマグロ小型魚混獲回避技術開発【増殖分野】

クロマグロ資源管理は、国際合意の下、小型魚の漁獲抑制が実行に移されているが、「待ち」の漁業である定置網は魚種の選択性が低く、主対象魚種の漁獲を維持しつつクロマグロ小型魚の選択的な漁獲回避技術の開発が求められている。本研究は、自走式水中ビデオカメラを用いて定置網揚網過程におけるクロマグロ小型魚と他の主要魚種の選択的漁獲の可能性を評価するとともに、分離落網を開発してその効果を把握することを目的として実施した。揚網中、クロマグロ小型魚は他魚種と異なる単独の魚群を形成して浅めの深度を遊泳していることがわかった。また、仕切り網と漏斗口を備えた分離落網が他魚種とクロマグロ小型魚分離に効果的であることが示された。



クロマグロ小型魚混獲回避技術開発

● マボヤ人工種苗生産に関する研究【増殖分野】

平成24年度から共同研究として取り組んできた山田町大浦地区におけるマボヤ人工採苗試験は確実な成果を得ており、漁業者からの要請が無かったことから、今年度は漁業者の自立的種苗生産技術の確立を目指して共同研究は行わなかった。マボヤ被嚢軟化症対策のため、平成28年7月から行ってきた被嚢軟化症発症海域で採集したマボヤの室内飼育（耐性株作出のための継代飼育を目的とする）は、平成29年7月に最後の1個体が死亡したため、失敗に終わっている。平成29年度は、無給餌の室内でも、水温を19℃に維持した状態でマボヤを1年間飼育可能であることが明らかとなった。

● サクラマス海水養殖試験【養殖分野】

平成28年度文部科学省国立大学改革基盤強化促進費事業により新たに整備された冷水魚陸上養殖研究設備を利用して、岩手県内水面水産技術センターとの共同研究の下、県内産サクラマス海水飼育試験を実施した。パー、スマルト両群の屋内施設における通年飼育試験により、両群間の海水生残性、成長の比較を行った。スマルト群は試験期間を通して生残率が高く維持されたが、個体間の成長のバラツキが大きく、出荷サイズ近くにまで育成できた個体は少数であった。飼育9ヶ月目よりスマルト群の約半数にギンザケ養殖用餌を与え、通常マス餌との比較により、肉質に与える影響を検証し、更にスマルト群育成個体の一部を親魚育成し、次世代における海水生残性を検証する予定である。



サクラマス海水飼育試験 肉質状況

● ニジマス（トラウトサーモン）海水養殖試験【養殖分野】

当初予定していた、秋から春にかけて屋外陸上施設におけるトラウトサーモン（ニジマス）海水飼育試験は、施設整備が遅れたため実施できなかったが、次年度の試験実施に向けて、屋外飼育施設への殺菌海水配管整備を行った。北海道大学、宮崎大学との連携により海水養殖高適合性種苗開発に向けて、通常ニジマス、降海型ニジマス（スチールヘッドマス）、高温耐性系ニジマスの飼育試験を開始し、各系統の海水養殖特性の検証を開始し、外部資金獲得に向けた活動を行った。今後も国内各地保有のニジマス系統について生理的特性情報を集積し、育種に向けた基盤形成を行う。

実践領域			教育研究領域			
三陸復興部門	地域創生部門	生涯学習部門	ものづくり技術 教育研究部門	三陸水産 教育研究部門	地域防災 教育研究部門	平泉文化 教育研究部門

● 光周期による摂餌活性制御試験【養殖分野】

大西洋サケなどによる先行研究をふまえて、岩手県産シロザケ稚魚を用いて、4光周期試験区（24L、16L:8D、12L:12D、8L:16D； L：明期，D：暗期）について明期間一定回数飽食給餌による飼育試験を約1ヶ月間実施したところ、当初8L:16D区が他区より有意に高成長を示した。これは明期の短い試験区では給餌間隔が短いことによる影響と考えられたため、その後、24L、16L:8D区で、明期間一定間隔飽食給餌へと変更したところ、給餌回数の多い24Lの方がより成長し、餌料転換効率も優る傾向を示した。この明期延長による成長促進効果は、摂餌活性持続による可能性があると考えられた。

● 新規養殖対象魚の開発（チョウザメ）【養殖分野】

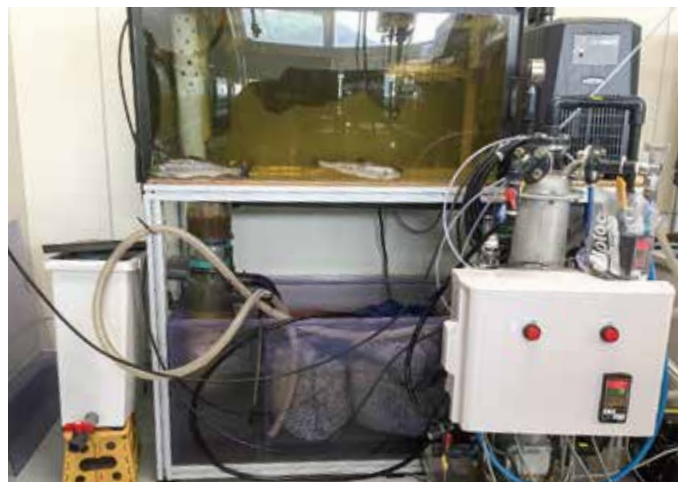
近年、国内各地でチョウザメ（キャビア）生産とそれを基にした地域振興に注目が集まっていることから、清水川養魚場（八幡平市）、岩手県内水面水産技術センター、北海道大学との共同で、チョウザメ種苗生産に向けた共同研究を開始した。清水川養魚場所有のアムールチョウザメ雌魚について卵巣生検を実施し、採卵可能な状態にまで卵母細胞が発達していることを確認できたことから、次年度に排卵誘発処理による採卵を目指すこととした。



新規養殖対象種チョウザメ

● 高濃度酸素溶解装置による養殖生産性向上に関する基礎研究【養殖分野】

高濃度酸素溶解装置製造企業との共同研究により本研究を行うこととした。本年度は共同研究全体計画についての打合せ（複数回）、共同研究契約締結、研究遂行のための外部資金獲得活動、本試験に向けた装置製作と動作確認のための予備試験を行った。なお、企業側より、本試験の対象魚として春銀毛サクラマスが要望され、一方、試験用高濃度酸素溶解装置の提供が冬になったため、次年度春の本試験開始に向けて秋銀化サクラマスを使用して予備試験を実施した。その結果、溶存酸素量が低下し、魚の代謝が上がる高水温で酸素供給を行えば摂餌量が低下しないことが観察された。



高濃度酸素試験酸素溶解装置と水槽

● 新規養殖対象魚の開発（サケマス類）【養殖分野】

サクラマス海水養殖において障害となる早期成熟に対する対応策として、岩手県内水面水産技術センターとの共同により、3倍体不妊化魚作出を行ったところ、作出効率が極めて低かったために海水飼育試験に必要な実験魚を確保出来なかった。次年度に再度、不妊化魚作出と海水飼育試験を実施することとした。一方、北海道大学との共同により、シロザケ×サクラマスの雑種3倍体魚を作出し、海水飼育試験を開始した。今後、海水適応性、成長特性、肉質などについて調査を行い、陸上養殖に向けた地域ブランド魚としての可能性を検証する。また、新潟県内水面水産試験場との共同研究により、サケ科全雌魚生産において問題になっている偽雄（性転換雄）作出における輸精管形成不全について組織学的検証を行い、日本水産学会大会において発表した。

● 複合養殖システムに向けた研究【養殖分野】

稚ナマコを同数、2基の水槽に収容し、片方にはサケマス飼育試験水槽から排出された糞、残餌を与え、他方は海水のみで飼育した。その結果、ナマコは魚類養殖排出物を摂食し、飼育試験開始20日間後の段階で成長が有意に促進されていることが確認された。また、海藻、ウニ、貝類との複合を目指して、岩手県水産技術センターと意見交換を行い、これらの生物についても魚類養殖との複合について共同研究を開始することとした。



複合的養殖に向けた研究

● 三陸水産物から新規水産食品の開発【加工・マーケティング分野】

三陸ホタテから麺類やアイスクリームを試作し、親子料理教室で試食とアンケート調査を行った。また高齢者食品を製造しているトース株式会社取締役経営企画室長神谷慎一氏と打ち合わせし、また今後の協力について意見交換した。

高鮮度凍結サバを解凍し、三枚におろしてから、半身に分量の塩をよく混ぜて、サバの水分が出た後、水で洗いしっかり水分をふき取ってから、お酢の調味液に15分から30分程軽く漬ける。しめてから、皮や骨を取り除き、刺身として喫食する。また皮を取り除かない場合、炙ることもできる。レアしめサバの開発について盛岡市すし屋である一の丸または釜石ヒカリフーズからの協力を得る予定である。



サバ各種製品の試作

● 三陸水産物鮮度保持に関する研究【加工・マーケティング分野】

三陸資源であるホタテ、イサダまたスズキについて、その水揚げ後の死後変化、凍結また冷蔵、加熱処理による筋肉の生化学特性について調べ、特にATP関連化合物、pH、筋原線維タンパク質の性状変化について測定し、高鮮度保持できる手法を確立する。

東松島の友水産とともに、アルコール凍結と独自の解凍法による熟成スズキの開発に着手した。これまで、「鮮度」という指標のみで価値を持っていた魚介類に対して、「熟成」による旨みという新しい価値を切り開くことによって、三陸沿岸部での新しい水産加工品開発を目指している。定期的な訪問と調査により漁獲から加工までを漁業者が一環して行うことで水産業における六次産業化の可能性と課題を探る研究も平行して行っている。

実践領域			教育研究領域			
三陸復興部門	地域創生部門	生涯学習部門	ものづくり技術 教育研究部門	三陸水産 教育研究部門	地域防災 教育研究部門	平泉文化 教育研究部門

● 料理教室の開催による地元産業界への啓発活動【加工・マーケティング分野】

釜石で獲れる水産物から新規練り製品（魚麵を含む）や新メニューを開発し、「親子料理教室」の企画・開催を通じて、「街浜連携」を促し、水産物の地産地消の促進を図る目的で料理教室を下記のとおり行った。

1回目 12月23日 釜石市尾崎白浜番屋 参加保護者4名・児童5名 協力 釜石湾漁協白浜浦女性部

2回目 2月17日 釜石市小佐野公民館 参加保護者3名・児童12名 協力 釜石湾漁協平田女性部

サバの竜田揚げ、レアしめさば、ホタテ麺や刺身を提供し、試食評価した。



親子料理教室 1回目



親子料理教室 2回目

【平成30年度の活動予定】

1 増殖分野

(1) 資源の持続的利用と(2) 水産資源増殖の高度化による新たな漁業生産体制の構築を主眼とした三陸水産業における持続的な水産システムの確立を狙いとし、(1)については主に①河川単位でのサケ類資源構造の現状把握と資源動態にもたらす資源の構造的な問題点把握、②大槌湾等沿岸魚類資源の初期生残機構の解明、③安家川における河川環境モニタリング、(2)については主に①定置網におけるクロマグロ小型魚の漁獲制御技術の開発、②ヨーロッパザラボヤの再生産機構特性の解明、③マボヤ人口種苗生産技術開発、④カゴ漁業での脱出口装着による資源管理の早期普及に向けたアウトリーチを進める。

2 養殖分野

(1) 三陸沿岸域に適合しうる陸上養殖システムの開発、(2) 三陸沿岸域に適合しうる新規養殖対象種の開拓 (3) 岩手大学学部生・大学院生の実地型教育と地元産業界への啓発活動など従来の取り組みに加えて、本年度9月に予定されている農学部水産システム学コース一期生の釜石キャンパス移行と専門教育(卒業研究ほか)開始に向けて、総合研究棟建設ほか教育環境の整備を行う。

3 加工・マーケティング分野

(1) 三陸水産物鮮度保持及びその高度利用に関する研究；特に三陸代表的水産物であるホタテ、サバ、イサダ、スズキについて漁獲から水揚げ、流通、加工消費まで鮮度保持技術の開発やその高度利用についての研究 (2) 漁獲物の性質(肉質など)の分子・生化学解析に根ざした加工技術に関する研究；特に養殖サケの肉質についての研究 (3) 蓄養さばからレアしめさばの商品化に向けた研究開発 (4) 魚食普及のために料理教室の開催

(6) 地域防災教育研究部門

部門長 南 正昭 (理工学部 教授)



地域防災教育研究部門を担う地域防災研究センターは、自然災害解析、防災まちづくり、災害文化の3つの分野の教育研究に取り組む。具体的には被災地域に入り、被災状況調査、地震・津波などの解析、復旧・復興まちづくりの支援、教育活動支援や伝承・記録の支援等を地域の人々とともに実践している。

さらに阪神淡路大震災、中越地震などの震災・復興の体験を持つ国内外の大学、または南海トラフ等の今後の震災が危惧されている地域の大学との連携を深め、過去・現在・未来を貫く相互の学びの場の創出へとつなげることを当面の課題とする。

活動テーマ と 概要

安全なまちづくりと災害文化を育む地域防災拠点の形成

代表者 理工学部：南 正昭

担当者 人文社会科学部：後藤 尚人、五味 壮平、田中 隆充、松岡 勝実、
杭田 俊之

教育学部：田代 高章、麥倉 哲、山崎 友子、大野 眞男、田中 成行

教育学研究科：森本 晋也

理工学部：小林 宏一郎、今野 晃市、越谷 信、本間 尚樹、

大河原 正文、大西 弘志、小笠原 敏記、小山田 哲也、

山本 英和、鴨志田 直人、松林 由里子

農学部：井良沢 道也、広田 純一、三宅 諭

連合農学研究科：比屋根 哲

地域防災研究センター：福留 邦洋、熊谷 誠

男女共同参画推進室：堀 久美

国際連携室：石松 弘幸

三陸復興・地域創生推進機構：今井 潤

- ・これまで岩手大学が実施してきた地域密着型の活動（防災体制構築への支援、防災教育）をさらに拡充し、東日本大震災による被災地の復興に向け、「施設づくり」「まちづくり」「ひとづくり」に貢献
- ・地域特性に応じた防災対策と、津波常襲地帯に暮らすための知恵である災害文化からなるボトムアップ型防災システム（三陸モデル）を構築
- ・三陸モデルを、今後巨大地震の派生が危惧される東南海地域などへ展開
- ・他大学、他研究機関と連携し、相互補完的な事業実施により効果的な成果を創出

活動内容

● 地域を支える防災リーダー育成プログラム

■日時：平成29年5月26日（土）～12月9日（土）

隔週土曜日

■場所：本学共用教育研究棟内リーダー育成プログラム講義室他

■概要：本プログラムは、地域の防災を推進するため、住民・コミュニティ・教育現場での自主的・自発的な活動を促進し、その啓発・教育及び実践の核となる人材の養成を目的として、一般市民を対象に、平成19年度より継続的に行っている。カリキュラムは物理および地学の基礎講習、地震・火山・地盤・洪水・津波防災・斜面災害・防災まちづくり・危機管理講座のテーマ別講習、被災地研修、修了製作を行う演習からなる。12月9日（土）には、外部評価委員として清水晃 国土交通省岩手河川国道事務所長、佐藤伸吾 国土交通省北上川ダム統合管理事務所長、及川隆 岩手県県土整備部部長らを招き、受講生の発表会並びに本プログラムの外部評価委員会、修了式を開催した。



防災リーダー育成2
防災リーダー育成プログラム修了証の授与



防災リーダー育成1受講者による発表の様子

● 岩手県教育委員会・岩泉町教育委員会との学校防災に関する協定

平成28年8月30日、台風第10号により岩手県では大雨による甚大な被害が発生した。この経験をこれからの学校防災の充実に生かしていくため、地域防災教育研究部門を担う地域防災研究センターは平成29年6月14日に、岩手県教育委員会及び岩泉町教育委員会と学校防災に関する協定を締結した。

協定締結前からも台風第10号に対する学校対応の課題や実例を紹介した「学校防災体制の充実に向けて」と題したリーフレットを作成し、県内の小中高校や教育委員会に配布するなど防災教育に関する活動を行っていたが、協定締結後は更に活動を活発化し、「学校版タイムライン」作成や、盛岡地方気象台の協力を得て、「台風・大雨から身を守る！」防災教育教材の開発に取り組んだ。平成30年3月29日には岩泉町にて、岩手県教育委員会並びに岩泉町教育委員会に学校版タイムラインや防災教育教材を贈呈した。

岩泉町立
門小学校版
タイムライン



防災教育教材

岩泉町立
門小学校版
タイムライン



学校版タイムライン

● 第19回地域防災フォーラム 未来につなぐ大震災の教訓
岩手大学×神戸大学連携フォーラム

- 日時:平成29年8月1日(火)
- 場所:本学理工学部キャンパス内 復興祈念銀河ホール
- 概要:「大震災の教訓をいかに未来につなげるか」、「災害危機管理リーダー」、「支援マネジメント」、「記録伝承」など4つの講演、それらをもとにした議論を行った。本学からは危機管理のためのリーダー育成に関する2題の講演、神戸大学および人と防災未来センターからは「大規模災害時の指定避難所外の避難者の発生傾向と支援マネジメント」、「災害記録を未来に伝えるために」と題して報告が行われた。質疑応答では会場から支援マネジメントに関して具体的方策についての質問や、震災関連アーカイブ作成後の利活用についての質問などが寄せられ、議論を深めた。



第19回フォーラム講演録表紙



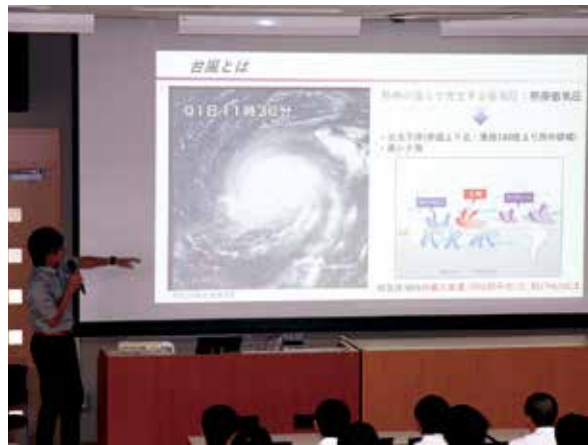
第19回地域防災フォーラム

● がんちゃん Jr. 防災リーダー養成講座の開催

- 日時:平成29年8月29日、9月1日、9月4日
- 場所:本学 GC1 講義室他
- 参加者数:403名
- 概要:盛岡市立上田中学校の生徒を対象に防災学習の講座を企画・運営した。地域防災研究センターの教員が講師を担当し、各回、「地震」、「大雨・台風」「家庭・地域での防災活動」とテーマを設定した講義と、訓練やワークショップなどを行った。理工学部の学生や教職大学院の院生もスタッフとして参加し、話し合いが深まるよう生徒たちへアドバイスをを行った。中学生には、この講座を通して中学生が災害時にどのように判断、行動すればよいかを学ぶとともに、家族や地域のために自分ができることを考える機会となった。



大雨・洪水ワークショップ



大雨・台風の講義

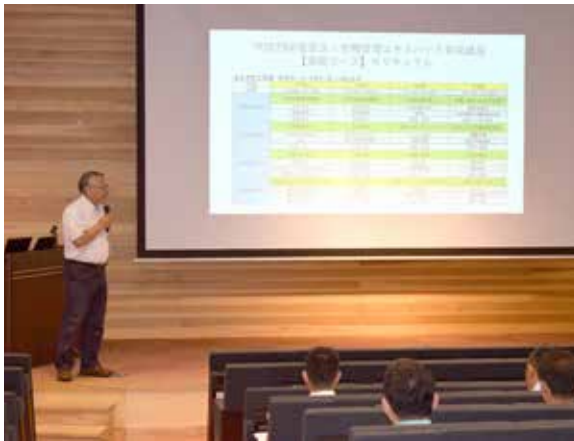
● 防災・危機管理エキスパート育成講座

■日時:平成 29 年 9 月 21 日 (木)、9 月 22 日 (金)、9 月 25 日 (月)、9 月 26 日 (火) の 4 日間

■場所:本学理工学部キャンパス内 復興祈念銀河ホール

■参加者数:33 名

■概要:防災・危機管理エキスパート育成講座の基礎コースを開催した。本講座は災害に直面した時、リーダーを補佐するエキスパートとして、災害対応とその効果的な推進のために必要な知識やスキルを習得することを目的に開催している。平成 29 年度は前年度と同様に、合計 4 日間で 16 科目の講義を行っており、自治体、消防署、医療関係、学校、一般の方など 33 名が受講した。岩手県内の各分野の現場で活動している方々を講師として招き、実際の現場における知見やノウハウを講義いただいた。受講後のアンケートでは有意義な内容だったという感想や、更に詳細な内容について学習を希望するといった意見が寄せられた。



越野客員教授によるカリキュラムの説明



講座の受講風景

● 岩手大学地域防災研究センター×国立研究開発法人土木研究所水災害・リスクマネジメント国際センター ICHARM~ 今後の研究連携に向けた学術交流

■日時:平成 29 年 12 月 4 日

■場所:本学地域防災研究センター会議室

■概要:水災害・土砂災害の防災、危機管理に関して、地域防災研究センターと国立研究開発法人土木研究所水災害・リスクマネジメント国際センター“ICARM”とで、最近の研究トピックについて話題提供、情報交換を行ったもの。地域防災研究センターからは自然災害解析部門と災害文化部門の教員を中心に、平成 28 年台風 10 号による土砂災害の実態調査や、発災時の教訓を生かした防災教育の取り組みが発表された。ICARM からは新たな洪水リスク指標開発をと災害情報共有ホームページを組み合わせた取り組みや衛星データを用いた大規模浸水域の早期把握、地形への影響評価技術などの発表があった。

● 「第3回 災害文化研究会 災害文化を考える～ことばと文学を切り口として」の開催

■日時：平成30年2月2日（金）～3日（土）現地巡検

■場所：本学総合教育研究棟（教育系）北桐ホール

■参加者数：2日／100名 3日：20名

■概要：1日目は、フォトジャーナリストを講師に迎えた講演とポスターセッションが開催された。ポスターセッションでは13件の発表中、6件が県内の高校やボランティア団体など参加者の多様性が見られるなか、活発な情報交換や議論も行われ、今後の研究会の活動の広がりが期待される内容となった、2日目は、宮古市重茂半島をフィールドに巡検が行われ、姉吉地区での津波教訓碑の見学や重茂漁協組合長による震災後の取り組みの紹介があった。



第3回災害文化研究会チラシ



第3回災害文化研究会
_re 災害文化研究会報告書表紙

● 第20回地域防災フォーラム 東日本大震災から7年を迎えて

■日時：平成30年3月6日（火）

■場所：本学総合教育研究棟（教育系）北桐ホール

■参加者数：35名

■概要：「東日本大震災から7年を迎えて」と題して、地域防災研究センターの各研究部門から年度活動報告が行われた。自然災害解析部門からは岩手宮城内陸地震後の継続調査や、VRを用いた防災教育コンテンツについて、防災まちづくり部門からは赤外線モーションセンサを用いた健康見守りシステムの開発や吉里吉里地区における自主防災計画や避難マップ等の作成支援について、災害文化部門からは「第3回災害文化研究会」の開催や、平成28年台風10号の教訓を生かした学校版タイムライン作成の取り組みなどの報告があった。報告のあと、3部門長とセンター長によるパネルディスカッションが行われ、今後の地域防災の取り組みや、成果の発信について議論がなされた。



五味教授による陸前高田グローバルキャンパスの取り組み紹介



南センター長、3部門長によるパネルディスカッション

実践領域			教育研究領域			
三陸復興部門	地域創生部門	生涯学習部門	ものづくり技術 教育研究部門	三陸水産 教育研究部門	地域防災 教育研究部門	平泉文化 教育研究部門

● 岩手大学×神戸大学 災害管理研究交流会の開催

■日 時：平成 30 年 3 月 8 日（木）

■場 所：本学地域防災研究センター会議室

■概 要：神戸大学都市安全研究センターとアジア諸国の災害・危機管理の専門家が地域防災研究センターを訪れ、研究交流会を開催した。神戸大学チームから話題提供の申し出があり、バングラデシュの山岳地域開発に伴う土砂災害の増加や、インドネシアメラピ火山の火砕流被災後の土地利用などに関する発表があった。岩手大学側からは、これまでの自然災害の調査経験や研究から得られた知見を踏まえたコメントが寄せられ、地域における自然災害に対する議論が交わされた。



ミャンマーのサイクロン被害について報告する神戸大学チーム

【平成 30 年度の活動予定】

平成 30 年度の活動として、地域防災研究センターでは、今年度の重要な取り組みとして 7 月に米国ハーバード大学と、中国清華大学との共催で、世界各国の防災・危機管理の研究者が集う「国際防災・危機管理研究岩手会議」を開催する予定である。また、今年度から、複数の教員で共通の研究テーマに取り組む研究グループ制とそれらグループへの予算支援による研究活動の促進を図っていく。継続的な取り組みとしては、地域や防災関係機関などからの社会的要請に基づき、「防災リーダー育成プログラム」と「防災・危機管理エキスパート育成講座」を引き続き行うほか、センター年報、活動成果などの刊行物発刊にも取り組んでいく。

(7) 平泉文化教育研究部門

部門長 藪 敏裕 (教育学部 教授)



平泉文化教育研究部門は、平泉文化センターが担当している。センターの目的は、仏国土（浄土）の理想郷として造営されたという平泉庭園文化を中心に平泉文化の意義を総合的に解明することにある。具体的には岩手県教育委員会や海外の諸大学等と連携を図り、これまでの研究成果を踏まえながら平泉文化を学術的・国際的な観点から研究し、平泉文化の国際的意義を明らかにし、「平泉学」として総合化を目指していく。

▼平泉文化研究センター



活動テーマ と 概要

平泉文化の普遍性に関する国際理解の一層の進展と 地域に遺る文化遺産を活かした地域振興への貢献

代表者 教育学部：藪 敏裕

担当者 人文社会科学部：樋口 知志、平田 光彦

教育学部：宇佐美 公生、菅野 文夫、今野 日出晴、境野 直樹、
佐藤 由紀男、藁谷 収

理工学部：平原 英俊、會澤 純雄、小野寺 英輝、

平泉文化研究センター：伊藤 博幸、劉 海宇

考古研究部門・文献学的研究部門・教育地域貢献部門の三部門を中心に活動を行った。内容は以下の通り。

1. 「岩手県における世界遺産についての調査・研究の継続と支援」では考古部門を中心に東アジアにおける古代庭園学及び陶磁器等の産地同定作業を行った。
2. 「平泉世界遺産教育の展開」では平泉学講演会、「平泉の文化遺産」の学校教材作成を行った。
3. 「地域創生関係」では平泉文化セミナー9回・公開講演会4回、釜石市との連携等を行った。
4. 「世界遺産活用のあり方（モデル化）の確立」では釜石市橋野高炉跡発掘現場の視察等を行った。

活動内容

● 考古研究部門：東アジアにおける古代庭園国際シンポジウムの開催

1. 2017年度 URR 事業として中国洛陽市文物考古研究院で「東アジアにおける古代庭園国際シンポジウム」を開催し、中国側の研究者は隋唐洛陽城の都市計画と庭園遺跡の考古新発見及び洛陽平泉山荘を中心に、日本側の研究者は世界遺産平泉の庭園と拡張登録を中心に、研究発表を行った。

2. 12月8日に中国社会科学院考古研究所の宋江寧氏を招へいし、「考古学から見た周原遺跡の形成およびその変遷」をテーマに、「東アジアにおける古代都城と庭園」講演会を開催した。西周都城の周原遺跡における80年余りの考古成果をまとめながら、周原遺跡の集落形態の形成及びその変遷について分析と総括を行い、また、周原遺跡の水池と水系にかかわる考古新発見をも紹介した。



洛陽市文物考古研究院で開催された URR 「東アジアにおける古代庭園国際シンポジウム」
(2017年10月11日)

● 考古研究部門：ポータブル複合 X 線分析による中国陶磁器の胎土分析

平泉では国産の陶磁器とともに多くの中国陶磁器が出土しており、時代が百年と限定されていることから各陶磁器の時代特定の貴重な基準となると言われている。この平泉出土の中国陶磁器の産地同定を進めるために、11月13～14日、平泉町で平泉出土中国産陶磁器の蛍光 X 線計測を当センター分析機器を使って行った。

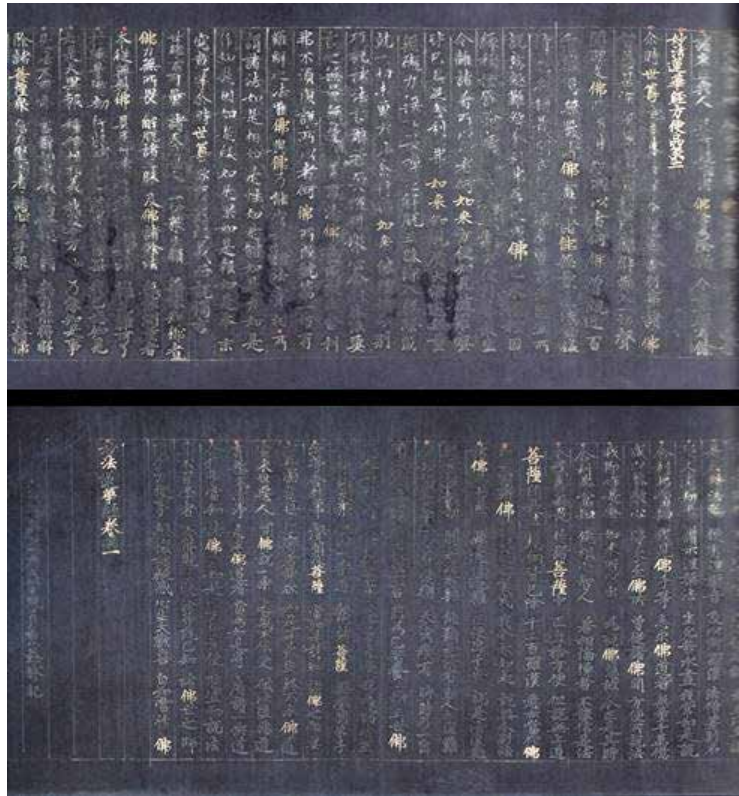
會澤純雄・平原英俊兼務教員らは1月27日の平泉文化フォーラムにおいて「ポータブル複合 X 線分析による白磁と青磁の胎土分析—中国及び平泉出土資料との比較研究」の報告を行い、中国および平泉出土資料の比較検討を行った。



平泉町において中国産陶磁器 X 線分析 (2017年11月13日)

● 文献学的研究部門：五代・両宋期における金銀字一切経の研究

1月27日、第18回平泉文化フォーラムにおいて劉海宇教授は「五代両宋期における金銀字一切経及びその政治的意義」を題して研究発表を行った。十世紀から一二世紀の五代・両宋期には金銀字一切経の存在及びその政治的意義を明らかにした。呉越国の開祖、銭鏐が子孫に残した「中原王朝をよく仕えよ」との遺訓を守った銭弘俶が、北宋の建国後すぐに入朝して策封を受け、また大蔵経の体裁も北宋の太祖皇帝の金字大蔵経に遠慮し、あえて銀字経に仏号のみを金字で書写する金銀字混書大蔵経の形式を襲ったものと考えられる。中原の王権に対する配慮こそは、銭弘俶の金銀字混書大蔵経が成立した理由であろうと結論付けた。



北宋期の金銀字混書法華経（浙江省瑞安県瑞光塔出土、浙江省博物館蔵）

● 文献学的研究部門：東アジアにおける経塚の起源及び源流の調査研究

中国・朝鮮半島における仏教文化の展開を視野に入れ、従来、日本で独自に成立したとされてきた経塚信仰を再検討し、仏塔に経典を埋納するという東アジアで広くみられる営為のなかに、日本経塚を新たに位置づけ直すとするため、劉海宇教授が「平成29年度研究人材育成支援経費」を申請して研究調査を行った。7月に中国浙江省・江蘇省における法舍利埋納遺跡調査、9月に韓国における経筒・金銀字経等の仏教遺物及び庭園遺跡の調査、2月に九州における経塚関連遺物調査を行った。一部の調査報告を『岩手大学平泉文化研究センター年報』第6集に掲載した。



中国における法舍利埋納調査（2017年7月3日）

実践領域			教育研究領域			
三陸復興部門	地域創生部門	生涯学習部門	ものづくり技術 教育研究部門	三陸水産 教育研究部門	地域防災 教育研究部門	平泉文化 教育研究部門

● 教育・地域貢献部門：第18回平泉文化フォーラムの開催

平泉に係わる研究成果を一般に公開することを目的として、毎年いわて高等教育コンソーシアムと岩手県および本学三陸復興・地域創生推進機構平泉文化教育研究部門の三者が共同で開催している。今年度は1月27・28日の両日、一関市文化会館において開催し、研究成果の一部を市民に公開した。当センターからの発表は、研究報告として劉海宇教授「五代兩宋期における金銀字一切経及びその政治的意義」と會澤純雄兼務教員「ポータブル複合X線分析による白磁と青磁の胎土分析—中国及び平泉出土資料との比較研究」を行なった。参加者は延べ400人。



第18回平泉文化フォーラム、岩渕学長挨拶（2018年1月27日）

● 教育・地域貢献部門：平泉文化セミナー例会の開催

本セミナーは、研究業績等を一般市民向けに発表することを目的として原則年10回程度開催することとしている。今年度は岩大教育学部教室において、第29回～第38回まで都合10回開催した。毎回20～25名の参加がある。



平泉文化セミナー第31回例会（2017年5月31日）

● 教育・地域貢献部門：平泉世界遺産登録6周年記念講演会の開催

6月に平泉世界遺産登録6周年を迎えるに当たり、奈良県立橿原考古研究所のト部行弘氏を招いて岩手県と共同で平泉世界遺産登録6周年記念講演会を行った。飛鳥の宮都に付随する庭園遺跡である飛鳥京跡苑池の発掘調査成果をもとに、飛鳥時代の庭園の特色を挙げ、奈良時代、平安時代の庭園に伝えられた要素と変化した要素を通して当時の日本人の思想的背景に迫る講演会であった。



平泉世界遺産登録6周年記念講演会（2017年6月17日）

● 教育・地域貢献部門：平泉文化研究センター講演会の開催

本講演会は、世界遺産平泉の価値を国際的な観点から検討することを目的に県内外の研究者向けに年一回程度開催することとしている。本年度は平泉仏教史をテーマに、3月22日日本学教育学部において、菅野文夫氏による「中尊寺供養願文模本成立の背景」及び菅田慶信氏による「平泉の仏会と仏土―「場」に立つ中世奥羽仏教の一コマ―」と題する講演会を行った。参加者20名。



平泉文化センター講演会（2018年3月22日）

【平成30年度の活動予定】

1. 岩手県における世界遺産についての調査・研究の継続と支援。世界遺産「平泉」について歴史学・考古学・理化学的分析等の学際的研究を推進する。
2. 平泉世界遺産教育の展開。継続的に行なっている世界遺産平泉（及び要望があれば釜石市と一戸町）を中心に、世界遺産教育の実施、世界遺産教育に関するカリキュラム作成を検討していく。
3. 三陸復興と観光振興への展開。当センターは、復興は「人づくり」をコンセプトにソフト面からこれに関わっていく。
4. 地域創生関係。地域に住む人々が、地域の貴重な遺産を守り、研究や観光資源として活用し、誇りをもって生活できるような地域の創生を支援する。
5. 世界遺産活用のあり方（モデル化）の確立。
6. 市民を対象とした郷土史学習支援事業。
7. 東アジアから見た日本経塚信仰の起源に関する総合的調査研究を展開する。